

平成20年度独立行政法人国立美術館年度計画

国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

1 美術振興の中心的拠点としての多彩な活動の展開

(1) 多様な鑑賞機会の提供

国立美術館は、利用者のニーズ、研究成果を踏まえ、各館の所蔵作品を活かした所蔵作品展を開催するとともに、日本のみならず、海外の美術館と連携しながら、近現代の作家の個展、新しい芸術表現の領域として注目されてきたメディアアート、さらにはアジアに眼を向けた展覧会などの企画展を開催する。

また、各館の企画・連携のあり方を検討し、各館における展覧会企画等の連絡調整、5館共同の展覧会開催の調整・実施等について検討する。

映画については、映画保存活動の成果を最大に活用しつつ、作家や時代、国やジャンルなど様々な切り口による企画上映を実施して、多様な鑑賞機会の提供を図る。また、映画産業の枠外で製作された日本映画の上映に着手する。

なお、入館者に対するアンケート調査を行い、そのニーズや満足度を分析し、結果を展覧会等に反映させるよう努める。

(東京国立近代美術館)

本館・工芸館 目標入館者数計：59万4百人

<本館>

所蔵作品展では、近代日本美術の流れを通史的に展観するという当館の役割を果たす。また、所蔵作品の研究成果に基づいて、北脇昇、近藤浩一路、今村紫紅らの作家の小企画展や、大正期の東京の文化的土壌や、コラージュという手法が近代美術に開いた新展開などについて小企画展を実施する。また、横山大観《生々流転》の全巻展示を実施する。

企画展は、時代(戦前・戦後)、地域(国内・海外)、ジャンル(絵画・彫刻・写真等)のバランスを考慮しつつ編成する。具体的には、戦後活躍した日本画家の回顧展(「東山魁夷展」)、建築家のドロージョーゼフ展(「建築がうまれるとき ペーター・メルクリと青木淳」展)、メディアアートなど最先端の表現を含む現代美術展(「エモーショナル・ドロージョーゼフ」及び「ビデオ・アート展」)、これまで取り上げられる機会の少なかった沖縄美術の展覧会、日本人写真家の個展(「高梨豊展」)などを開催する。

目標入館者数計：51万3千4百人

ア 所蔵作品展 目標入館者数計：19万8千人

「近代日本の美術」展 5回展示替え

10回程度の小・中規模の特集展示

イ 企画展 目標入館者数計：31万5千4百人

(ア)「東山魁夷展」

期間：平成20年3月29日(土)～5月18日(日)
(47日間(うち平成20年度44日間))

共催：日本経済新聞社

目標入館者数：27万2千人(うち平成20年度25万3千人)

(イ)「建築が生まれるとき ペーター・メルクリと青木淳」

期間：平成20年6月3日(火)～8月3日(日)(54日間)

会場：ギャラリー4

目標入館者数：1万6千人

(ウ)「現代美術への視点6 エモーショナル・ドローイング」

期間：平成20年8月26日(火)～10月13日(月・祝)(43日間)

共催：京都国立近代美術館、国際交流基金

目標入館者数：1万5千人

(エ)「沖縄から/沖縄へのまなざし」

期間：平成20年10月31日(金)～12月21日(日)(45日間)

目標入館者数：1万5千人

(オ)「高梨豊展」

期間：平成21年1月20日(火)～3月8日(日)(42日間)

目標入館者数：1万6千人

(カ)「ビデオ・アート展」

期間：平成21年3月31日(火)～6月7日(日)

(61日間(うち平成20年度1日間))

目標入館者数：2万2千人(うち平成20年度4百人)

<工芸館>

所蔵作品展では、素材分野や主題などによって特集展示を行う。具体的には、花の主題と人形作品による「近代工芸の名品 花と人形」、近年の収集で充実してきたアール・デコやモダンデザイン作品を中心としたコレクションによる「ヨーロッパの近代工芸とデザイン/新収蔵品 2006-07」、夏休み企画としての「こども工芸館」、漆と木竹の名品を特集する「うるし・木竹/近代工芸の名品」展を開催する。夏季に開催する「こども工芸館」では会場に参考資料等を設置するとともに、セルフガイドの作成、鑑賞教室を実施するなど小・中学生にも親しみやすい内容を提供するほか、教員研修を行うなど教育機関との連携を深めるよう努める。

企画展では、これまで日本ではあまり知られていないイタリア現代陶芸の4大巨匠の筆頭である陶芸家、カルロ・ザウリの全貌を紹介する初めての回顧展を開催する(会場：本館)とともに、戦後のクラフト・デザイン、ジュエリー制作で戦後工芸界をリードしてきた平松保城の回顧展、現代デザイン展として陶磁器デザイナーの小松誠の主要な作品を紹介する展覧会を開催する。

目標入館者数計：7万7千人

ア 所蔵作品展 目標入館者数計：4万8千人

「近代工芸の名品」 5回展示替え

- イ 企画展 目標入館者数計：2万9千人
(ア)「カルロ・ザウリ展 イタリア現代陶芸の巨匠」
期間：平成20年6月17日(火)～8月3日(日)(42日間)
会場：本館1階
共催：京都国立近代美術館、ファエンツァ市、エミリア・ロマーニャ州、カルロ・ザウリ美術館、日本経済新聞社
目標入館者数：1万人
(イ)「平松保城展」
期間：平成20年10月4日(土)～12月7日(日)(56日間)
目標入館者数：9千人
(ウ)「小松誠展」
期間：平成20年10月28日(火)～12月21日(日)(48日間)
会場：ギャラリー4
目標入館者数：1万人

<フィルムセンター>

上映会では、収集と研究の成果に基づいて映画人や製作国、ジャンルなどのテーマ別に企画上映を実施する。所蔵作品を活用した上映会と海外同種機関との連携により外国作品を紹介する上映会を開催する。また、外国映画の紹介などで映画文化に多大な貢献をした川喜多かしこの生誕100年を記念した上映会を開催するほか、日本の映画産業の枠外で製作された日本映画を取り上げるシリーズの第1回として「ぴあフィルム・フェスティバルの30年」を開催する。

展覧会では、スチル写真やポスターの所蔵コレクションを活用しつつ、文学という切り口を導入した「映画の中の日本文学 Part1」や、ソ連時代初期の貴重なオリジナル・ポスターによる「無声時代ソビエト映画ポスター展」を開催する。また、上述の上映企画と関連させて「川喜多かしこ展」を開催する。

上映会・展覧会 目標入館者数計：12万2千人

- ア 上映会 目標入館者数計：11万1千人
(大ホール)
(ア)「ルノワール+ルノワール展」開催記念 ジャン・ルノワール映画の世界 ジャン・ルノワール監督名作選」
期間：平成20年4月1日(火)～4月23日(水)(20日間)
共催：日本テレビ、読売新聞東京本社
目標入館者数：9千人
(イ)「発掘された映画たち2008」
期間：平成20年4月24日(木)～5月15日(木)
平成20年5月23日(金)～6月1日(日)(28日間)
目標入館者数：1万人
(ウ)「EUフィルムデーズ2008」

期間：平成20年5月16日(金)～5月22日(木)(6日間)
小ホールでも開催

共催：欧州委員会代表部及びEU加盟国大使館・文化機関

目標入館者数：1千人

(エ)「スターと監督 長谷川一夫と衣笠貞之助」

期間：平成20年6月3日(火)～7月20日(日)(42日間)

目標入館者数：1万5千5百人

(オ)「生誕100年 川喜多かしことヨーロッパ映画の黄金時代」

期間：平成20年7月25日(金)～9月28日(日)(57日間)

共催：川喜多記念映画文化財団

目標入館者数：2万5千人

(カ)「生誕110周年 スターと監督 大河内傳次郎と伊藤大輔」

期間：平成20年10月7日(火)～11月21日(金)(39日間)

目標入館者数：1万2千人

(キ)「第9回東京フィルメックス 特集上映」

期間：平成20年11月22日(土)～11月30日(日)(8日間)

共催：特定非営利活動法人東京フィルメックス実行委員会

目標入館者数：3千5百人

(ク)「生誕百年 映画監督 亀井文夫」

期間：平成20年12月2日(火)～12月27日(土)(23日間)

目標入館者数：4千人

(ケ)「カナダ・アニメーション映画名作選」

期間：平成21年1月6日(火)～1月18日(日)(12日間)

共催：シネマテーク・ケベコワーズ

目標入館者数：2千人

(コ)「日本オランダ年2008-2009 オランダ映画祭」

期間：平成21年1月20日(火)～2月8日(日)(18日間)

共催：オランダ映画祭実行委員会、オランダ大使館

目標入館者数：3千人

(サ)「日本映画史横断 怪獣・SF映画特集」

期間：平成21年2月10日(火)～3月29日(日)(42日間)

目標入館者数：1万2千5百人

(小ホール)

(シ)「映画の中の日本文学 Part1」

期間：平成20年4月18日(金)～5月4日(日)(9日間)

金、土、日のみ上映

目標入館者数：1千5百人

(ス)「EUフィルムデイズ2008」

期間：平成20年5月23日(金)～6月5日(木)(12日間)

大ホールでも開催

共催：欧州委員会代表部及びEU加盟国大使館・文化機関

目標入館者数：2千人

(セ)「日本インディペンデント映画史シリーズ ぴあフィルム・フェスティバルの30年」

期間：平成20年6月24日(火)～7月18日(金)(22日間)

共催：ぴあ株式会社

目標入館者数：4千人

(ソ)「アンコール特集：2007年度上映作品より」

期間：平成20年8月22日(金)～9月7日(日)(9日間)

金、土、日のみ上映

目標入館者数：2千人

(タ)「映画の教室2008」

期間：平成20年10月31日(金)～11月16日(日)(9日間)

金、土、日のみ上映

目標入館者数：2千5百人

(チ)「アメリカ映画史研究」

期間：平成21年2月20日(金)～3月8日(日)(9日間)

金、土、日のみ上映

目標入館者数：1千5百人

イ 展覧会 目標入館者数計：1万1千人

(ア)「映画資料でみる 映画の中の日本文学 Part 1」(併設：「展覧会 映画遺産」)

期間：平成20年4月4日(金)～7月20日(日)(93日間)

目標入館者数：4千人

(イ)「生誕100年記念 川喜多かしこ展」(併設：「展覧会 映画遺産」)

期間：平成20年7月25日(金)～9月28日(日)

平成20年10月7日(火)～12月26日(金)(127日間)

共催：川喜多記念映画文化財団

目標入館者数：4千5百人

(ウ)「無声時代ソビエト映画ポスター展」(併設：「展覧会 映画遺産」)

期間：平成21年1月8日(木)～3月29日(日)(70日間)

目標入館者数：2千5百人

(京都国立近代美術館)

所蔵作品展については、関西を中心とした近・現代美術の調査・研究成果の公開を主とするとともに、「ルノワール+ルノワール」「アーツ&クラフツ展」「上野伊三郎・リチ コレクション」などの企画展と連動する、テーマ性の高い小企画をより充実させる。

企画展については、近代日本画変革運動「パンリアル美術協会」の中心作家の一人「下村良之介」の回顧、工芸では国際アーツ&クラフツ運動の中での日本の民芸運動の貢献を検証、建築・デザインでは日本近代建築黎明期の中心の一人であった上野伊三郎の業績をウーン工房との関係で再評価するなど、日本作家を国際動向との相関において研究した成果を、建築空間の再構成などにより、鑑賞者に理解されやすいよう展示の工夫を行う。また、最新メディア・アートの重要作家「椿昇」を特別展として開催する。

目標入館者数計：59万1千人

ア 所蔵作品展 目標入館者数計：23万1千人
コレクション展「近代の美術・工芸・写真」(306日間)8回展示替え
企画展と関連した小企画及びコレクション展単独での特集企画

イ 企画展 目標入館者数計：36万人

(ア)「生誕100年記念 秋野不矩展」

期間：平成20年4月8日(火)～5月11日(日)(31日間)

共催：毎日新聞社、京都新聞社

目標入館者数：2万1千人

(イ)「ART RULES KYOTO」

期間：平成20年4月29日(火)～5月11日(日)(13日間)

目標入館者数：3千人

(ウ)「ルノワール+ルノワール」

期間：平成20年5月20日(火)～7月21日(月・祝)(55日間)

共催：オルセー美術館、読売テレビ、読売新聞大阪本社

目標入館者数：20万1千人

(エ)「没後10年 下村良之介展」

期間：平成20年7月29日(火)～8月31日(日)(30日間)

目標入館者数：1万人

(オ)「没後30年 ユージン・スミスの写真展」

期間：平成20年8月5日(火)～9月7日(日)(30日間)

目標入館者数：1万人

(カ)「生活と芸術 アーツ&クラフツ展」

期間：平成20年9月13日(土)～11月9日(日)(50日間)

共催：朝日新聞社

目標入館者数：7万5千人

(キ)「現代美術への視点6 エモーショナル・ドローイング」

期間：平成20年11月18日(火)～12月21日(日)(30日間)

共催：東京国立近代美術館、国際交流基金

目標入館者数：1万3千人

(ク)「上野伊三郎・リチ コレクション」新収蔵記念 ウィーンから京都へ、建築から工芸へ

期間：平成21年1月6日(火)～2月8日(日)(30日間)

目標入館者数：1万4千人

(ケ)「椿 昇展」

期間：平成21年2月17日(火)～3月29日(日)(36日間)

目標入館者数：1万3千人

(国立西洋美術館)

所蔵作品展では、美術館コレクションの中核である松方コレクションを中心に据えつ

つ、中世末期以降20世紀初頭に到る西洋美術の流れを概観できる展示を行う。また、所蔵作品を多様な視点から楽しむプログラムとして宗教・芸術家・修復をテーマに「Fun with Collection'08」を開催し、児童・生徒向けプログラム等を実施する。企画展では、西洋美術史上の傑作として名高いティツィアーノの《ウルビーノのヴィーナス》を中心にイタリア美術におけるヴィーナス図像の系譜を網羅的に紹介する「ウルビーノのヴィーナス展」、フランスの風景画の巨匠コローが20世紀にまで与えた影響を回顧する「コロー展」、日本で初めての本格的な紹介となるデンマーク19世紀末の画家「ハンマースホイ展」、ルーヴル美術館から17世紀のヨーロッパ絵画を集めた「17世紀ヨーロッパ絵画展」を開催する。

目標入館者数計：75万人

ア 所蔵作品展 目標入館者数計：25万人
「ルネッサンス以降のヨーロッパ近世絵画」
「近・現代絵画と彫刻」
Fun with Collection'08（平成20年7～8月）

イ 企画展 目標入館者数計：50万人
（ア）「ウルビーノのヴィーナス 古代からルネッサンス、美の女神の系譜」
期間：平成20年3月4日（火）～5月18日（日）
（67日間（うち平成20年度43日間））
共催：読売新聞社
目標入館者数：24万人（うち平成20年度18万人）
（イ）「コロー 光と追憶の変奏曲」
期間：平成20年6月14日（土）～8月31日（日）（69日間）
共催：読売新聞社、NHK
目標入館者数：20万人
（ウ）「ヴィルヘルム・ハンマースホイ」
期間：平成20年9月30日（火）～12月7日（日）（60日間）
共催：日本経済新聞社
目標入館者数：6万人
（エ）「ルーヴル美術館 17世紀ヨーロッパ絵画展」
期間：平成21年2月28日（土）～6月14日（日）
（93日間（うち平成20年度27日間））
共催：日本テレビ
目標入館者数：42万人（うち平成20年度6万人）

（国立国際美術館）

所蔵作品展については、同時開催の企画展の内容に関連付けた作品を展示するほか、代表的な作品の展示を行う。

企画展については、現在、世界で最も注目されている中国の現代美術を歴史的な視点を盛り込みながら紹介する展覧会を開催するとともに、アジアとヨーロッパの古今の美

術を自己と他者との関係の中に捉える展覧会を国立民族学博物館と共同開催する。

また、独自の会場構成で知られる若手作家の塩田千春の近作を紹介するほか、新しいメディアアートの現況を示す「液晶絵画 Still/Motion」展並びに近代絵画の巨匠「モディリアーニ」の回顧展を開催し、幅広い観客層の関心に応じる。

目標入館者数計：43万1千人

ア 所蔵作品展 目標入館者数計：15万7千人
「コレクション1～4」4回展示替え

イ 企画展 目標入館者数計：27万4千人
(ア)「エミリー・ウングワレー展 - アボリジニが生んだ天才画家 - 」
期間：平成20年2月26日(火)～4月13日(日)
(42日間(うち平成20年度12日間))

共催：読売新聞社

目標入館者数：1万4千人(うち平成20年度4千人)

(イ)「液晶絵画 Still/Motion」
期間：平成20年4月29日(火・祝)～6月15日(日)(43日間)
目標入館者数：1万5千人

(ウ)「モディリアーニ展」
期間：平成20年7月1日(火)～9月15日(月・祝)(67日間)
目標入館者数：10万人

(エ)「塩田千春 精神の呼吸」
期間：平成20年7月1日(火)～9月15日(月・祝)(67日間)
目標入館者数：10万人

(オ)「アジアとヨーロッパの肖像 Self and Other」
期間：平成20年9月30日(火)～11月24日(月・祝)(49日間)
目標入館者数：1万5千人

(カ)「アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 - 」
共催：国際交流基金
期間：平成20年12月9日(火)～平成21年3月22日(日)(83日間)
目標入館者数：2万人

(キ)「新国誠一の《具体詩》」
期間：平成20年12月6日(土)～平成21年3月22日(日)(85日間)
目標入館者数：2万人

(国立新美術館)

自主企画展においては、近年世界的に注目を集めている中国の1980年代以降の現代美術を紹介する「アヴァンギャルド・チャイナ展」、日本と世界の新しい現代美術の現況について若手作家の先鋭な活動を毎年定期的にグループ展で紹介する「アーティスト・ファイル」(2008、2009)を開催し、現代の多様な美術動向の紹介に努める。

共催展においては、広く近現代美術を対象とし、新たな視点による展覧会を実現する。

オーストラリアのアボリジニ出身の現代作家による個展やモディリアーニやピカソといった近代の巨匠の全貌を紹介する回顧展、ウィーン美術史美術館のコレクションを通じてヨーロッパの静物画の成立と展開を探る展覧会の開催、また、国内では伝統的な表現や美意識を現代的な感性と融合させ高い評価を受けた加山又造の回顧展を開催し、国内外の優れた作品を幅広く紹介する。

目標入館者数計：86万4千人

- (ア)「アーティスト・ファイル 2008 - 現代の作家たち」
期間：平成20年3月5日(水)～5月6日(火・祝)
(55日間(うち平成20年度31日間))
目標入館者数：2万7千人(うち平成20年度1万5千人)
- (イ)「モディリアーニ展」
期間：平成20年3月26日(水)～6月9日(月)
(66日間(うち平成20年度60日間))
共催：日本経済新聞社
目標入館者数：20万人(うち平成20年度18万2千人)
- (ウ)「エミリー・ウングワレー展 - アボリジニが生んだ天才画家 - 」
期間：平成20年5月28日(水)～7月28日(月)(54日間)
共催：読売新聞社
目標入館者数：5万人
- (エ)「ウィーン美術史美術館所蔵 静物画の秘密」
期間：平成20年7月2日(水)～9月15日(月・祝)(66日間)
共催：東京新聞
目標入館者数：15万人
- (オ)「アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 - 」
期間：平成20年8月20日(水)～10月20日(月)(54日間)
共催：国際交流基金
目標入館者数：5万人
- (カ)「巨匠ピカソ - 愛と創造の軌跡」
期間：平成20年10月4日(土)～12月14日(日)(62日間)
共催：朝日新聞社
目標入館者数：25万人
- (キ)「DOMANI・明日展2008 - 未来を担う美術家たち」
期間：平成20年12月13日(土)～平成21年1月26日(月)(28日間)
共催：文化庁
目標入館者数：1万5千人
- (ク)「加山又造展」
期間：平成21年1月21日(水)～3月2日(月)(36日間)
共催：日本経済新聞社
目標入館者数：10万人
- (ケ)平成20年度(第12回)「文化庁メディア芸術祭」

期間：平成21年2月4日（水）～2月15日（日）（11日間）
共催：文化庁メディア芸術祭実行委員会
目標入館者数：2万人

（コ）「アーティスト・ファイル2009」

期間：平成21年3月4日（水）～5月6日（水・祝）
（56日間（うち平成20年度24日間））

目標入館者数：2万7千人（うち平成20年度1万2千人）

（サ）「ルーヴル美術館展 ルーヴルの子供たち」

期間：平成21年3月25日（水）～6月1日（月）
（60日間（うち平成20年度6日間））

共催：朝日新聞社

目標入館者数：20万人（うち平成20年度2万人）

国立美術館 目標入館者数計：334万8千4百人

所蔵作品展（展示）：89万5千人

企画展（企画上映）：245万3千4百人

-2 企画機能強化のため、各館における展覧会企画等について連絡・調整を行うとともに、各館の企画・連携のあり方を検討する。

-3 平成22年度に国立新美術館において開催予定の、国立美術館全体の所蔵作品を最大限に活かした展覧会について、具体的な企画の内容や運営方法の検討を行う。

地方における鑑賞機会の充実を図るため、全国の公私立美術館等と連携して、地方巡回展を行うとともに、全国の公立文化施設等を会場にして優秀映画鑑賞推進事業を実施する。

ア 国立美術館巡回展

「近代日本洋画のながれ」（担当館：東京国立近代美術館）

国立美術館が所蔵する主要な洋画作品のうち、明治期から昭和戦前期の代表的作品を展示し、近代日本美術の流れを紹介する。

（ア）期間：平成20年11月14日（金）～12月14日（日）

会場：福井県立美術館

（イ）期間：平成20年12月21日（日）～平成21年3月1日（日）

会場：高知県立美術館

イ 各館の巡回展

（ア）巡回展「東京国立近代美術館工芸館所蔵 人形」

東京国立近代美術館工芸館が所蔵する、人形作品を展示し、昭和初期から現代までの人形作品の変遷や現代の人形制作をめぐる動向などを紹介する。

a 期間：平成20年12月23日（火・祝）～平成21年2月15日（日）

会場：碧南市藤井達吉現代美術館（愛知県）

b 期間：平成21年2月21日（土）～3月末日頃

会場：佐野美術館（静岡県）

（イ） 国立西洋美術館は、版画コレクションによる地方巡回展について、平成21年度・22年度の巡回先を募集する。

ウ 優秀映画鑑賞推進事業

国民の映画文化や映画芸術への関心を高め、映画フィルム保存の重要性について、理解を促進するため、文化庁との共催事業として、教育委員会、公共文化施設等と連携・協力して、全国各地で映画の巡回上映を実施する。

プログラム：88作品22プログラム（1プログラム4作品）

日本映画史を彩る名匠たちの代表作や、スターが活躍するヒット作、時代劇、青春映画などジャンルごとにそれを代表する名作、時代を画した話題作などで構成する。同時に、地域の特色を持った構成を工夫する。

期間：平成20年7月14日（月）～平成21年3月15日（日）

会場：全国130会場以上

国立美術館は、展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広報活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて入館者数の目標を設定し、その達成に努める。

（2）美術創造活動の活性化の推進

国立新美術館は、美術団体等が行う展覧会（公募展）に対して、会場を提供する業務を行う。

ア 平成20年度及び平成21年度に施設を使用する美術団体

（ア）平成20年度に施設を使用する美術団体等に会場を提供する。

（イ）美術団体等が作品搬入や審査等を行う作品整理室及び審査室等について、効率的な使用が可能となるよう利用調整を図る。

（ウ）使用についての手引き（資料や備品一覧）の検証を行い、効率的かつ円滑な実施が図られるよう充実に努める。

（エ）施設及び備品等の維持管理及び保全に関する態勢を整える。

（オ）美術団体等が行う展覧会の入館者数等の報告管理の態勢を整える。

（カ）美術団体等と連携した教育普及事業の態勢を整える。

イ 平成22年度以降の準備

（ア）平成22年度に施設を使用する美術団体等の決定

（イ）平成23年度に施設を使用する美術団体等の募集

ウ 平成19年度に施設を使用した美術団体等の展覧会開催状況等について実態を把握するためアンケート調査を実施する。

メディアアートなど、国際的にも注目される新しい領域の芸術表現作品の展覧会等について、以下のとおり実施する。

ア 東京国立近代美術館及び京都国立近代美術館では、メディア・アートなど先端的な

表現領域を採り上げる展覧会として「エモーショナル・ドローイング」展を、また、東京国立近代美術館ではビデオアートの歴史と現状をテーマとした展覧会として「ビデオ・アート展」を開催する。

イ 東京国立近代美術館では、建築作品の生成過程に光を当てる、ドローイングや模型による展覧会として「建築が生まれるとき ペーター・メルクリと青木淳」展を開催する。

ウ 京都国立近代美術館は、平成20年度にマルチメディアとロボット工学の成果を駆使する現代美術家・椿昇の個展を開催する。

また、欧米を拠点に活動するメディア・ミックスの女性作家グループ「チックス・オン・スピード」の映像と音楽のコンサートを核とした短期の展覧会を開催する。

「ルノワール+ルノワール」において、会場内における絵画と映画との同時展示を試みる。

エ 国立西洋美術館は、建築専門の客員研究員を招へいし、本館の設計者で近代建築の巨匠であるル・コルビュジエについて、平成21年の資料展実施に向けて館内資料調査及び海外調査を進める。

オ 国立国際美術館は、ビデオによる表現の新たな可能性を切り開きつつある国内外の作家を紹介し、新しいメディアアートの現況を示す「液晶絵画 Still/Motion」展の開催や「アヴァンギャルド・チャイナ展」においてビデオアート作品を紹介する。

カ 国立新美術館は、「アーティスト・ファイル2008」や「アヴァンギャルド・チャイナ展」においてビデオアート作品を紹介、また、「文化庁メディア芸術祭」においてメディアアートなどを紹介する。

また、CG-ARTS協会等の協力を得て、館内モニターを活用しメディアアートの上映を推進する。

(3) 美術に関する情報の拠点としての機能向上

国立美術館は、所蔵作品、展覧会活動、その他の活動状況を積極的に広く社会に紹介し、国立美術館についての理解を得るよう努める。

ア 国立西洋美術館においては、ホームページと収蔵作品検索システムとの連携により、展示中の作品の適切な情報更新に努める。

イ 国立新美術館においては、国内の美術館等で開催される展覧会に関する情報を収集し、インターネット等を介して提供するシステム(「アートコモンズ」)の収録対象先も含め一層の充実に努める。また、海外美術研究拠点(フリーア美術館、ハイデルベルク大学図書館、コロンビア大学エイヴリー建築・美術図書館及びシドニー大学フィッシャー図書館)に国内美術展カタログを寄贈する。

法人本部のホームページについて内容の充実に図り、国立美術館の活動について周知広報を強化する。

また、各館の日本語版・英語版ホームページの内容の充実に努め、展覧会情報や調査研究成果の公表等、積極的な情報発信に努める。

(東京国立近代美術館)

研究紀要掲載の論文全文をホームページの研究紹介のページから閲覧できるようにする。

(京都国立近代美術館)

展覧会図録を寄贈している京都府立図書館、大阪府立中央図書館、滋賀県立図書館、兵庫県立図書館、奈良県立図書館の蔵書リストを同館ホームページに掲載し、随時更新する。

(国立西洋美術館)

ホームページの活用を促進する。

ア イベントへの直接予約システムを導入する。

イ インターネット上で国立西洋美術館の所蔵作品画像が添付されたメッセージカードを送付することができるグリーティング・カード・システムという利用者サービスを行う。

(国立国際美術館)

ア 所蔵作品、展覧会情報、講演会、教育普及事業等のイベント情報を掲載する。

イ 情報コーナーのパソコンによる所蔵作品閲覧の充実を図る。

ウ 託児サービス実施情報を掲載する。

(国立新美術館)

ア 展覧会事業、情報収集・提供事業、教育普及事業など、館の事業情報等を広く普及広報するため、ホームページの掲載情報の充実を図るとともに、適切に更新する。

イ 英語版ホームページに加え、多言語による情報提供の充実を図る。

ウ 国立新美術館ニュースなどをホームページへ掲載し、研究成果を発信する。

美術史その他関連諸学に関する資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、各館の情報コーナー、アトライブラリー、資料閲覧室等において、情報サービスの提供を実施する。

ア 東京国立近代美術館、国立西洋美術館及び国立新美術館は、美術図書館連絡会による美術図書館横断検索システムに参加し、自館図書資料のみならず、東京国立博物館、東京都現代美術館など8館が所蔵する図書資料全体について横断検索を可能とし、美術館図書室の所蔵図書情報へのアクセスをより容易なものにする。

イ 国立西洋美術館においては、通常の書籍流通では入手困難な美術館刊行物やチラシ等散逸しやすい資料の収集・公開に努める。また、所蔵作品ガイド映像を拡充するとともに、作品情報端末を新たに設置する。

ウ 国立国際美術館においては、情報コーナーにおける国内外の美術図書充実とパソコンによる所蔵作品閲覧の充実を図る。

エ 国立新美術館においては、アトライブラリーの図録・図書資料の充実に努めるとともに、別館内の特別資料閲覧室において研究者向けに貴重図書等の閲覧サービスの充実に努める。

所蔵作品データのデジタル化及び公開を推進する。特に国内洋画家に続き、国内彫刻家の著作権許諾手続きを進め、国立美術館所蔵作品総合目録検索システムの掲載画像の増加に努める。併せて、同システムにおいて、作家及び作品に関わる解説文の閲覧を可能にするようコンテンツの充実を図る。また、ネットワークの一元管理を実施した上で、各館の所蔵作品管理システムの統合について検討を進める。

(4) 国民の美的感性の育成

美術の一層の普及のため、年齢や理解の程度に応じたきめ細かい多様な事業を展開するとともに、美術教育に携わる教員等に対する美術館を活用した鑑賞教育に関する研修や学校で活用できる教材の開発などの事業を行う。また、学校や社会教育施設に対する、これら事業の広報に努める。

(東京国立近代美術館)

<本館>

企画展ごとに講演会、ギャラリートーク等を実施するとともに、所蔵作品展においてガイドスタッフ(ボランティア)によるガイドツアーなどを実施するほか、以下の教育プログラムを実施する。

ア 小・中・高等学校からの要請に応じて、児童・生徒に対するギャラリートークやガイダンスの実施

イ 企画展における小・中学生用セルフ・ガイドの配布と学校への送付、小・中学生を対象とする鑑賞プログラム(夏休み)の実施及びその実践例の教員への提示

ウ 教員等に鑑賞授業の提案等を行い、また、鑑賞教育の場としての美術館の普及に資するため、小・中・高等学校の教員に対する企画展の解説・鑑賞機会の提供(年2回程度)

エ 企画展に関する講演会(8回)及びギャラリートーク(6回)等の実施並びに
研究員・作家等による所蔵作品展に関するギャラリートーク(5回)の実施

<工芸館>

美術館を利用した鑑賞教育の充実に資するため、学校等との連携協力を推進するとともに、対象年齢や経験に応じた指導案の提供、教材の開発を行う。また、来館者の興味や関心を一層高めるため、展覧会ごとにギャラリートーク等を実施する。

ア 夏季の「こども工芸館」展の会場に小・中学生の作品理解を促すための参考資料の設置

イ 工芸作品の鑑賞補助資料の作成

ウ 教員等向けの指導案の開発や研修による教育機関との連携

エ 児童・生徒を対象とした陶芸の技法体験を通じた、鑑賞教育のモデルケースの開発

オ 美術大学などの教員、学生の特別観覧(熟覧)の推進

カ 工芸課研究員のほか、外部研究者や作家によるギャラリートーク(17回)及び講演会(2回)の実施

<フィルムセンター>

ア 上映会・展覧会におけるギャラリートーク等の実施

イ 研究員の解説や弁士の公演なども交えながら映画の多様性に触れる機会をつくることを目指すため、小・中学生を対象とした「こども映画館」を実施(夏休み期間、4日間程度)

ウ 相模原市内の小・中学生を対象とした上映会を実施(相模原市教育委員会との連携事業、2~3回程度)

(京都国立近代美術館)

美術鑑賞教育への関心を高めることを重点目標に置き、外部からの自発的要望を積

極的に支援し、現場指導者の質の向上及び指導者の数的拡大を目指す。

ア 学校等からの要請による美術館利用についての教員研修会等の受入れの促進

イ 教員やNPO団体の美術館利用プログラムに対する支援

ウ 学校、各種団体からの要請による解説の受入れ

エ 高等学校・大学の授業現場との積極的連携を図る

オ 企画展に関連した講演会（10回程度）の実施

カ 東京国立近代美術館フィルムセンターとの共催による映画上映（1回）の実施

（国立西洋美術館）

児童・生徒を対象としたプログラムをはじめ、多くの人々に美術と美術館に親しんでもらうためのプログラム、コレクションを活用したテーマ性のある企画、対象を限定したプログラムなど、それぞれの効果を考慮した幅広いレベルと内容のプログラムを提供する。

ア Fun with Collection'08、また、これに関連した講演会及び創作・体験プログラムなどの実施（6回）

イ Fun Day'08 開催時に、美術館と作品を楽しむ自由参加型プログラムの実施（4回程度）

ウ 企画展に関連した「先生のための観賞プログラム」の実施（小・中・高等学校の教員対象）（4回）

エ ファミリー・プログラム「どようびじゅつ」の実施（18回）

オ 「スクール・ギャラリートーク」（小・中・高等学校の団体対象）の実施（予約制）

カ クリスマス・プログラムの実施（4回）

キ 障害者を対象とする特別プログラムの実施（1回）

ク 企画展に関連した講演会（8回程度）、スライドトーク（12回程度）及び音楽プログラム（1回）の実施

（国立国際美術館）

幅広い層の人々に美術鑑賞の機会をより身近に感じてもらえるよう、企画展ごとに関連講演会、ギャラリートークなどを開催するとともに、子ども向けプログラムを実施する。また、近隣の美術担当教員との意見交換の場を持ち、生徒を美術館にひきつける方策について検討を行う。

ア 鑑賞支援教材制作に関連した「ジュニア・セルフガイド」の発行（1回）

イ 鑑賞実践プログラムに関連した「こどもびじゅつあー」の実施（6回）

ウ 鑑賞支援制作プログラムに関連した「こどものためのワークショップ」の実施（4回）

エ 大学の課外授業及びスクーリングによる団体鑑賞の受入れ

オ 小・中・高等学校団体鑑賞の受入れ

カ 教員研修の実施（予約制）

キ 教員と美術館の関係を活性化し、美術館の効果的活用及び生徒の来館機会の増加を図るため、「先生のための国立国際美術館活用ガイド」の発行

ク 企画展に関連した講演会（5～6回）、ギャラリートーク（5～6回）及びアーティストトーク（3回）の実施

（国立新美術館）

来館者の作品鑑賞の充実を目的として、展覧会ごとに講演会やギャラリートークを実施するほか、より多くの人々が美術に触れ、美術に親しむ機会を提供するためのプログラムを幅広い層を対象に実施する。

- ア 展覧会に合わせた講演会及びギャラリートーク等の開催（14回）
- イ 作家等によるワークショップ及び講演会の開催（4回）
- ウ 子どもを対象としたワークショップ及び美術ツアーの実施（2回）
- エ 中学生以上を対象とした鑑賞ガイドの配付（1回）
- オ 公募団体等との連携によるワークショップ及びギャラリートークの実施
- カ 学校、各種団体への鑑賞ガイダンスの実施

ボランティアや支援団体の育成と相互協力による教育普及事業の充実を図る。

（東京国立近代美術館）

<本館>

- ア ガイドスタッフ（ボランティア）約40名により、所蔵作品展の所蔵作品ガイド（毎日）及び「ハイライト・ツアー」（10回程度）を実施する。
- イ ガイドスタッフによる小・中学生グループの受入れなど、鑑賞プログラムの充実を図る。

<工芸館>

- ア ガイドスタッフ（ボランティア）30人程度により、展示解説並びに展示品と同等の参考作品や重要無形文化財保持者が使用していた資料等に触れる鑑賞教室（一般及び子ども向け）を実施する。
- イ 外国人及び国際的な文化交流に関心を持つ日本人を対象とした英語による鑑賞教室を実施する。
- ウ 研究員によるフォローアップ研修や作家によるレクチャーを開催して、ボランティアスタッフの意欲とガイドテクニックの向上を図る。

（京都国立近代美術館）

- ア 「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」を主催する京都市教育委員会等との連携による、ボランティアの受入れ及び活動の充実を図る。
- イ 友の会の活動において、京都市立芸術大学との連携による定期演奏会、見学会及びワークショップ等の事業を実施する。

（国立西洋美術館）

- ア ボランティアスタッフによる、ファミリープログラム及び小・中・高等学校生の団体を対象とした所蔵作品展でのスクール・ギャラリートークを実施する。ファミリープログラムの「どようびじゅつ」（18回）については企画から参加してもらうことでボランティアの育成にもつながるようにする。その他に、Fun with Collectionに関連したプログラム補助や、クリスマス・プログラムの補助（4回）を行う。また、今年度はボランティアの新規募集を実施する。
- イ ボランティアの育成を目的として、プログラム遂行のためのスキルアップ研修及び広く美術に関する知識を学ぶための研修を実施する（月1回程度）。また、プログラムの拡大に伴い新規に募集したボランティアについても、年度の後半に研修を行う。
- ウ 都立上野高校の「奉仕」課外授業に協力し、高校生ボランティアを活用する。

(国立国際美術館)

ア 学生ボランティアを受け入れ、展覧会、講演会及びワークショップ等のプログラムに参加させる等、活動の充実を図る。また、美術資料の整理を通じ、美術館活動の基本を学べるようにする。

イ 友の会については、会員参加型のイベントの開催等、活動内容等の充実を図るとともに、法人会員の加入に努める。

(国立新美術館)

ア 美術館の事業に関心を持つ学生を対象に実務経験の機会の提供を目的に、国立新美術館サポート・スタッフとして学生ボランティアを受け入れる。

イ 教育普及事業や情報収集提供事業等への企業協賛制度の導入を検討する。

ウ 近隣関係施設と連携・協力し、マップの作成・配布等を実施する。

京都国立近代美術館において、東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵フィルムを用いた上映会を開催し、鑑賞機会の拡大と映画文化の普及を図る。(東京国立近代美術館フィルムセンター及び京都国立近代美術館の共同開催)

(5) 国立美術館における展示、教育普及その他の美術館活動の推進を図るため、調査研究を計画的に実施し、その成果を美術館活動に反映させる。実施に当たっては、国内外の博物館・美術館及び大学等の機関との連携を図る。

また、募集情報等の共有を図り、科学研究費補助金等の研究助成金の申請や外部資金の獲得を促進する。

(東京国立近代美術館)

< 本館 >

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 東山魁夷に関する調査研究 (長野県信濃美術館との共同研究)

イ 建築家のドローイングに関する調査研究

ウ アジアを中心とする線描芸術に関する調査研究 (京都国立近代美術館等との共同研究)

エ 沖縄の美術に関する調査研究 (沖縄県立博物館・美術館との共同研究)

オ 高梨豊に関する調査研究

カ ヴィデオ・アートに関する調査研究

キ ポール・ゴーギャンに関する調査研究 (名古屋ボストン美術館との共同研究)

ク 河口龍夫に関する調査研究

ケ 権鎮圭と韓国の近代彫刻に関する調査研究 (武蔵野美術大学等との共同研究)

コ 小野竹喬に関する調査研究 (笠岡市竹喬美術館、大阪市立美術館との共同研究)
教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 鑑賞教育に関する美術館と学校の連携や、学校の授業と美術館での鑑賞の連続性に関する調査研究 (東京都図画工作研究会等との共同研究)

イ 国立美術館の情報資源と文化遺産オンライン、国立情報学研究所の WebcatPlus 及び国立情報学研究所「想 - IMAGINE」とが連携して検索・閲覧できるシステムの公開を実施する。

<工芸館>

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

ア カルコ・ザウリに関する調査研究（京都国立近代美術館との共同研究）

イ ルーシー・リーに関する調査研究（益子陶芸美術館、大阪市立東洋陶磁美術館との共同研究）

ウ 戦後クラフト運動の調査研究

エ 近・現代の人形の展開に関する調査研究（碧南市藤井達吉現代美術館、佐野美術館との共同研究）

オ 戦後デザインの成立と展開についての調査研究（武蔵野美術大学、多摩美術大学との共同研究）

教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 工芸作品の鑑賞方法や美術館教育のあり方の調査研究（多摩美術大学、女子美術大学との共同研究）

イ 陶芸制作体験によって児童・生徒が、より質の高い作品理解を得るための鑑賞教育のあり方に関する調査研究（倉敷市立美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館との共同研究）

<フィルムセンター>

収集・保存のための調査研究を次のとおり実施する。

ア 海外の国際フィルム・アーカイブ連盟（F I A F）会員のうち、コレクション調査を行っていない団体や国内同種機関、現像所等からの情報に基づく未発見の映画フィルムの所在調査及び文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」の結果に基づき、新たに残存が確認された映画フィルムの詳細調査

イ 映画フィルムの保存、デジタル技術を活用した復元に関する調査研究（F I A F 同種研究機関、国内の映画研究教育機関、映像機器メーカー、現像所等との共同研究）

上映会、展覧会及び教育普及事業のための調査研究を次のとおり実施する。

ア ジャン・ルノワール監督に関する調査研究

イ 衣笠貞之助監督と長谷川一夫に関する調査研究

ウ 川喜多かしこと東和映画に関する調査研究（川喜多記念映画文化財団との共同研究）

エ 伊藤大輔監督と大河内傳次郎に関する調査研究

オ 亀井文夫監督に関する調査研究

カ カナダのアニメーション映画に関する調査研究

キ オランダ映画史と近年のオランダ映画に関する共同研究

ク 日本のジャンル映画（怪獣映画、S F 映画等）に関する調査研究

ケ 映画産業の枠外で製作された日本映画・インディペンデント映画等の歴史に関する調査研究

コ 戦前期のハリウッド映画に関する調査研究

サ 大正期までの日本文学と日本映画の関係に関する調査研究

シ 無声時代のソビエト映画とソビエト映画ポスター、また、それらの日本への紹介に関する調査研究

（京都国立近代美術館）

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

- ア 近代日本画における重要女性作家・秋野不矩の画業を回顧することによる、日本画壇における女性の地位に関する調査研究(浜松市秋野不矩美術館との共同研究)
 - イ 女性メディア・ミックスのグループ「チックス・オン・スピード」の活動を研究することによる、現代のメディア・アートの最前線に関する調査研究
 - ウ 画家オーギュスト・ルノワールと映画監督ジャン・ルノワールという絵画と映画という異なる分野で活動した親子の作品を同時展示することによる、絵画と映画の相関性に関する調査研究(Bunkamura ザ・ミュージアムとの共同研究)
 - エ 戦後の日本画革新運動「パンリアル」の中心作家である下村良之介の業績を回顧することによる、日本美術史におけるパンリアル運動に関する調査研究
 - オ アメリカの写真家・ユージン・スミスの写真作品を研究することによる、近代ドキュメンタリー写真に関する調査研究
 - カ 国際アーツ&クラフツ運動への日本の工芸・デザインの貢献を検証することによる、国際アーツ&クラフツ運動の中での日本の民芸運動に関する調査研究(ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館との共同研究)
 - キ アジアを中心とする線描芸術に関する調査研究(東京国立近代美術館等との共同研究)
 - ク 日本近代建築とデザイン教育の黎明期に大きな貢献を果たした上野伊三郎・リチ夫妻とウイーン工房との関係に関する調査研究
 - ケ マルチ・メディアを駆使する美術家・椿昇の作品と、日本のメディア・アートの現状に関する調査研究(東京都現代美術館との共同研究)
- 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。
- ア 上野伊三郎・上野リチ作品資料に基づく、近代日本建築史及びデザイン教育史に関する調査研究(京都工芸繊維大学、京都女子大との共同研究)
 - イ ユージン・スミス写真作品及びドキュメンタリー写真と水俣に関する調査研究
 - ウ 館所蔵の作品・資料の体系的分類等に関する調査研究
 - エ 教育普及事業における友の会活動の役割と成果の活用に関する調査研究

(国立西洋美術館)

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

- ア イタリア美術におけるヴィーナス図像に関する調査研究(ウフィツィ美術館との共同研究)
 - イ コローとフランス美術に関する調査研究(ルーヴル美術館との共同研究)
 - ウ ヴィルヘルム・ハンマースホイとデンマーク美術に関する調査研究(オアドロプゴー美術館とロイヤルアカデミー・ロンドンとの共同研究)
 - エ 17世紀ヨーロッパ絵画に関する調査研究(ルーヴル美術館との共同研究)
- 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。
- ア 旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究
 - イ 中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究
 - ウ 平成16年度以降収集したデンマーク版画作品に関する調査研究
 - エ 西洋美術作品の保存修復に関する調査研究(ポール・グティ美術館との共同研究)

- オ 美術館教育に関する調査研究（東京大学との共同研究）
- カ 館蔵資産の資源化に関する調査研究
- キ 「火山噴火罹災地の文化・自然環境の復元の総括」（科学研究費補助金）5年目
- ク 「火山噴火罹災遺跡における生活・文化環境の復元研究」（科学研究費補助金）5年目
- ケ 「15～17世紀パルマ派美術の歴史的再構築に関する調査研究」（科学研究費補助金）2年目
- コ 「芸術遺産／資本の表象 19世紀仏の挿絵入り美術出版物に関する調査研究」（科学研究費補助金）3年目
- サ 「初期アッティカ黒像式陶器の技法と図像に関する研究」（科学研究費補助金）2年目
- シ 「Kleitias and Athenian Black-Figure Vases in the Sixth-Century B.C.」（科学研究費補助金）2年目

（国立国際美術館）

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

- ア 液晶絵画展に関する調査研究（三重県立美術館、東京都写真美術館との共同研究）
- イ 塩田千春に関する調査研究
- ウ モディリアーニとプリミティヴィスムに関する調査研究（国立新美術館との共同研究）
- エ アジア・ヨーロッパの自己像と他者像に関する調査研究（ASEMUS（アジア・ヨーロッパ・ミュージアム・ネットワーク）、国立民族学博物館、福岡アジア美術館、神奈川県立近代美術館、神奈川県立歴史博物館との共同研究）
- オ 新国誠一を中心にコンクリート・ポエトリーに関する調査研究（武蔵野美術大学と共同研究）
- カ 杉本博司に関する調査研究（金沢21世紀美術館と共同研究）
- キ 中国現代美術に関する調査研究（国際交流基金、国立新美術館、愛知県美術館との共同研究）

教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。

- ア 現代の絵画に関する調査研究
- イ アジアの現代美術並びに美術館運営に関する調査研究（アジア次世代キュレーター会議での共同研究）
- ウ 「モダニズムと中東欧の近代芸術に関する国際・学術共同研究」（科学研究費補助金）
- エ 展示における所蔵作品の活用方法についての調査研究

（国立新美術館）

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。

- ア 日本の現代美術の動向に関する調査研究
- イ モディリアーニとプリミティヴィスムに関する調査研究（国立国際美術館との共同研究）
- ウ エミリー・カーメ・ウングワレー（オーストラリアのアボリジニ美術）に関する

- る調査研究（オーストラリア国立博物館、国立国際美術館との共同研究）
 - エ 中国現代美術に関する調査研究（国際交流基金、国立国際美術館、愛知県美術館との共同研究）
 - オ 16 - 17世紀におけるヨーロッパの静物画に関する調査研究（ウィーン美術史美術館等との共同研究）
 - カ ピカソに関する調査研究（サントリー美術館、ピカソ美術館等との共同研究）
 - キ 加山又造に関する調査研究（高松市美術館等との共同研究）
 - ク ルーヴル美術館所蔵作品のうち「子ども」をテーマとした作品に関する調査研究（ルーヴル美術館等との共同研究）
- 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。
- ア 美術館の教育普及事業（ワークショップ、鑑賞ガイド等）に関する調査研究
 - イ 日本の近現代美術資料に関する調査研究
 - ウ 戦後の公立美術館における展覧会データの収集及び公開に関する調査研究
 - エ 美術情報の収集・提供システムに関する調査研究
 - オ 美術館におけるデジタル・アーカイブの構築に関する調査研究

（6）快適な観覧環境等の提供

各館において、動線の改善や鑑賞しやすさ、理解のしやすさに配慮するため、展示や解説パネル等の工夫を行う。

（東京国立近代美術館）

<本館>

- ア 現代美術への理解を促すため、アーティストトークにおける作家本人による作品解説を、所蔵作品展音声ガイドのプログラムに追加する。
- イ 動線について、外部の専門家などと連携しつつ、来館者のニーズを把握した上で、対応を検討する。
- ウ 所蔵する11点（うち1点は寄託作品）の重要文化財を広く知ってもらうため、ホームページなどによる紹介や鑑賞カードを配布するなど広報に努める。

<工芸館>

- ア フロアプラン、作品名の読み方、素材等を記載した出品リストを作成・配布するとともに、作家や作品の解説パネルやキャプションを作成・掲示し、充実した鑑賞のための情報提供を促進する。
- イ 所蔵作品展開催時に配布している各作品の注目ポイントを写真と文章で明示した鑑賞カードの充実を図り、専門知識をもたない来館者も興味深く鑑賞できるよう情報提供に努める。

<フィルムセンター>

- ア 展覧会の開催に際し、展示作品の出品目録を配布する。
 - 「映画資料でみる 映画の中の日本文学 Part1」(1回)
 - 「生誕百年記念 川喜多かしこ展」(1回)
 - 「無声時代ソビエト映画ポスター展」(1回)
 計3回配布
- イ 携帯電話サイトによる上映番組案内等の発信を行う。
- ウ 「映画の広場」において、大型ディスプレイにより、上映作品や展覧会情報を提

供する。

(京都国立近代美術館)

ア 小・中学生に対してガイドブックを配布する。

イ 英・日併記の情報誌「MEET OSAKA」(発行:(財)大阪21世紀協会)に展覧会情報を掲載し、外国人旅行者に対する普及広報を実施する。

(国立西洋美術館)

ア 国立西洋美術館ブリーフガイドを配布する。

イ 企画展「作品リスト(日本語、英語)」及び小・中学生向け解説「ジュニアパスポート」を配布する。

ウ 国立西洋美術館本館の建築探検マップ(日本語、英語、仏語、中国語、韓国語)を配布する。

(国立国際美術館)

ア 館概要リーフレット(日本語、英語、中国語、韓国語)を配布する。

イ 展覧会において可能な限り「フロアガイド」を配布する。

ウ 小・中学生向け解説「ジュニア・セルフガイド」を配布する。

エ 英・日併記の情報誌「MEET OSAKA」(発行:(財)大阪21世紀協会)に展覧会情報を掲載し、外国人旅行者に対する普及広報を実施する。

(国立新美術館)

ア 展覧会において可能な限り「フロアガイド」を配付する。

イ 中学生以上を対象とした鑑賞ガイドを配付する。

入館料及び開館時間の弾力化等により、入館者サービスの向上を図るため、次のとおり実施する。

ア 所蔵作品展及び特別展の高校生及び18歳未満の観覧料を無料とする。

イ 高校生及び18歳未満の観覧料無料化の普及広報に努める。

ウ 展覧会の混雑状況を考慮し、開館日・時間等について柔軟な対応を行う。

エ 学生等の美術鑑賞への興味と関心を高めるため、キャンパスメンバーズ制度の普及広報に努める。

オ 東京国立近代美術館本館・工芸館及び国立西洋美術館は、東京都が実施する外国人旅行者への観光事業「ウェルカムカード」に参加し、外国人旅行者に対して所蔵作品展の割引観覧を実施する。

カ 東京国立近代美術館及び国立新美術館は、共通入館券事業「ぐるっとパス」に参加し、観覧料の低廉化を図る。

キ 京都国立近代美術館及び国立国際美術館は、共通入館券事業「ミュージアムぐるっとパス・関西2008」に参加し、観覧料の低廉化を図る。

ク 東京国立近代美術館及び国立西洋美術館は、東京都が実施する青少年育成事業「家族ふれあいの日」に参加し、所蔵作品展観覧料の優待を実施する。

(東京国立近代美術館)

ア 国民に広く美術作品等に親しんでもらうため、所蔵作品展を廉価で観覧できるパスポート観覧券の広報に努める。

<本館・工芸館>

ア 年始は1月2日(金)から開館する。

イ 休館日のうち、4月28日(月)及び5月7日(水)を開館する。

<フィルムセンター>

ア 企画上映「スターと監督 長谷川一夫と衣笠貞之助」「生誕110周年 スターと監督 大河内傳次郎と伊藤大輔」及び共催上映「生誕100年 川喜多かしことヨーロッパ映画の黄金時代」「第9回東京フィルムメックス特集上映」において、1日3回上映を実施する。

イ 小ホールにおいては「京橋映画小劇場」と題する上映会を年間5企画程度実施するとともに、外部団体との共催上映「EUフィルムデーズ2008」「ぴあフィルム・フェスティバルの30年」を実施する。

ウ 観客動向調査等を含む調査及び検討を行い、平成21年度からの会員制度等の導入について検討する。

(京都国立近代美術館)

ア 休館日のうち、5月6日(火・祝)を開館する。

イ ルノワール+ルノワール展開催中の7月1日(火)～7月21日(月・祝)の開館時間を午後7時まで延長する。

ウ 大文字・五山送り火の日である8月16日(土)に夜間開館を実施する。

(国立西洋美術館)

ア クレジットカード及び電子マネー(Suica 及びPASMO)による観覧券の窓口販売を行う。

イ 休館日のうち、4月28日(月)、8月11日(月)を開館する。

ウ 年始は1月2日(金)から開館する。

エ 春の企画展開催日から秋の企画展閉会日までの開館時間について、閉館時間を午後5時30分まで延長する。

オ 美術館無料開放日「Fun Day」を開催し、より多くの人々にコレクションと美術館をアピールする。(所蔵作品展無料)

カ 「国際博物館の日」を所蔵作品展無料観覧日とし、上野地区の諸機関と連携してイベントを行う。

キ 12月を中心にクリスマスイベント「ミュージアム・クリスマス in 国立西洋美術館」を開催する。

(国立国際美術館)

ア 小学生以下の子どもを対象とした託児サービスを実施する。

イ 企画展開催中の金曜日の閉館時間を午後7時まで延長する。

ウ 休館日のうち、5月6日(火・祝)を開館する。

(国立新美術館)

ア 近隣の美術館と「六本木アート・トライアングル」を構成し、相互割引制度の実施に努める。

イ 施設を使用する美術団体等と連携し、可能な限り企画展との観覧料割引制度の実施に努める。

ウ 可能な限り同時期に開催される企画展の同時割引の実施に努める。

エ 共催展開催に際して、共催者と高校生無料招待日の設定について協議し、了解を得たものから逐次実施する。

オ 他館と同時に開催する「ピカソ展」では連携して観覧料の割引を設定する。

カ クレジットカード及び電子マネー（Suica 及び PASMO）による観覧券の窓口販売を行う。

キ 来館者数に応じ柔軟な券売対応に努める。

ク 小学生以下の子どもを対象とした託児サービスを実施する。

利用者のニーズを踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等の充実を図る。
国立新美術館では、ミュージアムショップ内に設けるミニギャラリーへの企画協力を行う。

2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・継承

- (1)-1 各館の収集方針に沿って、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の蓄積を図る。
なお、作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適切な購入を図る。また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機動性の向上に努める。

（東京国立近代美術館）

<本館>

近代日本美術の体系的コレクションの充実を図る。特に、次の点に留意する。

1970年代以前の欧米主要作家の作品の補完

1970年代から現代までのビデオ・アートの重要作品の収集

パブリックスペースに設置する作品の収集

新しいメディアによる作品収集の検討

<工芸館>

近代日本における工芸の体系的コレクションの充実を図る。特に次の点に留意する。

明治から昭和初期の工芸の近代化を証する作品の補完

戦後の伝統工芸や造形的な表現の現代作品の収集

ヨーロッパの工芸及びモダンデザイン作品の充実

現代工芸を代表する橋本真之の鍛金大作《果樹園 果実の中の木もれ陽、木もれ陽の中の果実》(1978-1988)の収集

<フィルムセンター>

戦前の日本映画を中心に散逸や劣化の危険性が高い映画フィルム、日本劇映画のうちで比較的収集率の低い1950年代後半から60年代及び90年代の映画フィルム、デジタル技術により復元された映画フィルム及び複製物、企画上映や国際交流事業に必要な映画フィルム、これまで受入れのなかった会社等からの寄贈映画フィルムの収集に努める。また、次の点について留意する。

企業等の管理下に置かれていないため、散逸・劣化の可能性が高い非商業映画・映画産業の枠外で製作された日本映画等の優先的な収集

文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」によって、新たに残存が確認されたフィルムの優先的な収集

（京都国立近代美術館）

我が国の近・現代において生み出された美術、工芸、建築、デザイン、写真等で、

主として美術・工芸について、近代日本美術史の骨格を形成する代表作及び各時期において重要な位置を占める記念的作品、近代美術史に組み込まれていくことになる現代美術の秀作を積極的に収集するとともに、優れた写真作品の収集にも努める。併せて各ジャンルの欠落部分を補い所蔵作品を充実させるほか、ビデオ・インスタレーションなどのメディアアートの作品収集を開始する。

また、故・上野伊三郎・リチ夫妻の作品・資料を中心に、初期日本近代建築とデザイン教育の実態を体系化する。さらに、故・川西英が所蔵した創作版画作品・資料の収集を継続し、創作版画の集中的アーカイブの構築を目指す。

京都に設置されている立地条件から、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した所蔵作品の充実を図る。また、村上華岳、富田溪仙などの収集を継続し、京都画壇作品の充実を図る。

(国立西洋美術館)

15世紀～20世紀初頭のヨーロッパ絵画の収集に努める。

ドイツ・フランドル・イタリア・フランスを中心にヨーロッパ版画のコレクションを充実させる。

旧松方コレクション作品の情報収集を継続する。

(国立国際美術館)

日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため、主として、次のとおり収集する。

1945年以降の日本の現代美術の系統的収集(日本の戦後美術を跡づける主要作)

国際的に注目される国内外の同時代の美術の収集(1990年代以降の欧米の絵画動向、1980年代以降の中国の美術動向)

また、映像・メディアアート担当客員研究員による収集候補作品のリストアップを行う。

(1)-2 寄贈・寄託品の受入れを推進するとともに、所蔵作品展等における積極的な活用を図る。

(1)-3 各館の陳列品購入費を一部留保し、高額作品の購入、緊急な購入等に対応する。なお、作品収集に関しては、学芸課長会議等で情報交換や連絡調整を行う。

(2)-1 保存施設の狭隘・老朽化への対応に取り組む。

国立美術館各館が所蔵する美術作品、映画フィルム、図書・資料等の増大に対応するため、相模原地域の活用方法を含め、収蔵施設・設備等の拡充について検討する。

京都国立近代美術館においては、収蔵庫の収蔵スペースを確保するため、ラック及び収蔵棚等の増設(第2年次分)を実施する。

(2)-2 東京国立近代美術館本館及び国立西洋美術館において、老朽化した空調用設備の更新及び改修工事を行い、保存・管理環境の整備を図る。

(3) 所蔵作品の保存状況を把握し、緊急に処置を必要とする所蔵作品から、分野ごとに計

画的に修復を行う。

東京国立近代美術館本館では、保存科学と修復に関する外部の専門家との定常的な連携による作品ケアの試みを開始したが、今後、作品移動の際の保存状況管理などについても連携を拡大する。

東京国立近代美術館工芸館では、温湿度の適正な調整を行い、全般的な作品の保全に努めるとともに、染織のシミや黴の除去、漆芸の汚れ除去や漆塗幕面の養生、人形のヒビの修復等、保存修復を緊急度の高いものから計画的に行う。

京都国立近代美術館では、平成20年度に予定している「上野伊三郎・リチ展」への出品予定作品と資料の修復・額装、及び将来開催予定の「パンリアル美術協会展」の出品候補となる三上誠らの日本画作品の修復作業を重点的に行う。

国立西洋美術館では、彫刻作品（ロダン、ピストルフィ）を中心に保存修復処置を行う。

国立国際美術館では、彫刻作品（堀内正和）の保存修復処理を行う。

- (4) 国内外の博物館・美術館、大学等と連携し、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を実施し、その成果を業務に反映させる。

東京国立近代美術館工芸館では、石川県立輪島漆芸技術研修所及び目白漆芸研究所、多摩美術大学等と、所蔵する漆芸並びに染織作品の保管と修復に関する調査研究を実施する。

京都国立近代美術館では、客員研究員の指導のもとに、写真作品の管理保管システム再編成を調査研究し、安全で迅速な利用態勢を整える。

国立西洋美術館では、研究開発を行った免震彫刻台座を増設する。また、ファシリテイ・レポート日本語版を作品貸出先に配布し、利用を開始する。

3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与

- (1) 各館の調査研究の成果については、研究紀要、図録への論文発表等によって広く発信する。

(東京国立近代美術館)

研究紀要、展覧会や企画上映に伴う図録、「現代の眼」、「NFCニューズレター」などの刊行物を発行する。

「カルロ・ザウリ展」「ルーシー・リー展」(平成21年度国立新美術館で開催予定)に関連して、イギリス、イタリアの研究者、工芸家との研究交流を行い、東洋陶磁学会研究会等で発表する。

工芸館名品集(染織)を刊行する。

工芸館開館30周年記念誌作成に関して調査及び資料の収集を行う。

(京都国立近代美術館)

展覧会に伴う図録、美術館ニュース「視る」を発行する。

京都国立近代美術館研究誌「CROSS-SECTION(S)」を発行する。

コレクションギャラリーでの小企画に対応した研究論文をホームページ上に公開する。

(国立西洋美術館)

年報、研究紀要、展覧会に伴う図録、「国立西洋美術館ニュース」を発行する。
展覧会に伴う小・中学生向け解説パンフレット「ジュニアパスポート」を発行する。

(国立国際美術館)

展覧会に伴う図録及び「美術館ニュース」を発行する。
開館30周年記念シンポジウム記録集を発行する。
小・中学生向け解説「ジュニア・セルフガイド」を発行する。
「新国誠一の《具体詩》」展の開催に伴い、詩集を発行する。

(国立新美術館)

年報、展覧会に伴う図録及び「国立新美術館ニュース」を発行する。
中学生以上を対象とした鑑賞ガイドを発行する。
「日本の美術展覧会開催実績報告書」を発行する。

(2) 国内外の研究者を招へいし、各種セミナー・シンポジウムを開催する。

第3回アジア美術館長会議を文化庁と共催する。

東京国立近代美術館本館では、「沖縄から / 沖縄への眼差し」展に際して、関連するテーマをめぐるシンポジウムを開催する。

東京国立近代美術館フィルムセンターでは、ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」(10月27日(月))を記念して講演会などを開催する。

京都国立近代美術館では、欧米を拠点とする作家8人を招き、メディア・アートとメディア・ミックスに関するコンサート及びレクチャーを開催する。

国立国際美術館では、「アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 - 」展開催を記念し、中国現代美術に関するシンポジウムを開催する。

国立新美術館では、「アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 - 」展開催にあわせて、中国現代美術に関するシンポジウムを開催する。

(3) 国際フィルム・アーカイブ連盟加盟機関及び国内映像関連団体並びに研究機関等と情報交換を図りながら、映画フィルム等の保存・修復活動を行う。

(4) 所蔵作品について、その保存状況や展示計画を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施する。

東京国立近代美術館フィルムセンターでは、最新の保存・復元の成果を広く紹介するために、所蔵日本映画を中心にパッケージ化し、地方および海外の同種機関を中心に上映の打診を行い、開催の可能性について検討を行う。

京都国立近代美術館は、静岡市のフェルケール博物館の「没後30年 ユージン・スミスの写真」展および千葉市美術館の「近代の写真」展へ、各120点以上の所蔵写真作品を貸与し、地方美術館の展覧会活動を支援する。

(5) 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、次の事業を行う。

小・中学校の教員や学芸員が、学校や美術館で活用できる鑑賞教育用教材の普及を図る。

各地域の学校と美術館の関係の活性化を図るとともに、子どもたちに対する鑑賞教育の充実に資するため、各地域の鑑賞教育や教育普及事業に携わる小・中学校の教員と学芸員が一堂に会し、グループ討議等を行う鑑賞教育に関する研修を実施する。

(6) インターンシップ等の事業を次のとおり実施する。

各館においてインターンシップ制度を実施する。

東京国立近代美術館工芸館・フィルムセンターにおいて、大学生の学芸員資格取得のための博物館実習を実施する。

国立西洋美術館において、大学院（東京大学大学院人文社会系研究科）と連携して西洋美術に関する教育を行う。

(7) 美術館の学芸担当職員等を対象としたキュレーター研修を実施し、その専門的知識及び技術の向上を図る。

(8)-1 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、我が国の映画文化振興の中核的機関として次のとおり実施する。

国内外で実施される各種映画祭や大学等の映画・映像に関する研究会等に協力する。

映画関係団体や大学等との連携協力を推進するための会議等を年間2～3回程度主宰する。

ア 川喜多記念映画文化財団、国際交流基金、ユニジャパンなど「日本映画の海外普及に関する関係諸団体との会合」を開催する。

イ 映画の保存等に関する専門家養成講座や博物館学芸員、図書館、公文書館などの司書を対象としたセミナーの開催について検討を進めるため識者や関係者を集め会議を開催する。

文化庁が実施する文化庁映画賞選考会に協力する。

文化庁芸術祭主催公演「日本映画名作鑑賞会」に協力する。

文化庁が実施する「日本映画情報システム」事業に協力する。

(8)-2 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、国立美術館内における独立した一館となるべく、その機能拡充について、今年度は、これまでの内部検討を踏まえた独立のための具体的な計画案を策定して評議員会等に諮る。

業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

- 1 業務運営の一層の効率化を進めるため、次のような措置を講ずる。
 - 各館において個別に行っている出版物の編集・発行業務について、可能なものから本部において一元的に実施する。
 - 国立美術館5館において情報システムネットワークの一元化を実施する。
 - 東京国立近代美術館及び国立西洋美術館において、エネルギー効率の高い空調設備等への更新工事を実施する。
 - 東京国立近代美術館等の管理・運営業務（展示事業の企画等を除く。）について、民間競争入札を実施する。
 - 施設の有効利用のため、外部貸出による講堂等の利用率の向上及び閉館時等におけるエントランスロビー等の活用を図る。
 - 対象業務の拡大や契約の包括化により、競争入札を推進する。
- 2 外部の有識者による評価及び職員の意識改善
 - 運営委員会及び外部評価委員会による業務の実績に関する評価を組織、事務、事業等の改善に反映させる。
 - 会計・人事等の研修を通じて職員の意識改革と資質の向上を図り、併せて組織の活性化を図る。
 - 人事評価制度について、見直しの検討を行う。
- 3 国立美術館が管理する情報の安全性の向上のため、コンピュータウィルスに関連する情報を、電子メール等により職員に周知し、注意喚起を促し、情報セキュリティへの意識向上に努める。
- 4 人件費を概ね1%削減する。

予算（人件費の見積もりを含む）収支計画及び資金計画

- 1 外部資金の活用、自己収入の増大に向けた定量的な目標を策定する。
- 2 予算（年度計画の予算）
 - 別紙のとおり。
- 3 収支計画
 - 別紙のとおり。
- 4 資金計画
 - 別紙のとおり。

その他主務省令で定める業務運営に関する事項

1 人事に関する計画

職員の研修計画

職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施する。

ア 新規採用者・転任者職員研修

イ 接遇研修

外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図る。

2 施設・設備に関する計画

施設・設備の整備を計画的に推進する。

2 予算(年度計画の予算)

平成20年度予算

(単位:百万円)

区 分	金 額
収 入	
運営費交付金	5,790
展示事業等収入	975
施設整備費補助金	8,970
計	15,735
支 出	
運営事業費	6,765
管理部門経費	1,894
うち人件費	309
うち一般管理費	1,585
事業部門経費	4,871
うち人件費	824
うち展示事業費	2,897
うち調査研究事業費	175
うち教育普及事業費	975
施設整備費	8,970
計	15,735

3 収支計画

平成20年度収支計画

(単位:百万円)

区 分	金 額
費用の部	5,604
經常経費	5,604
管理部門経費	1,785
うち人件費	309
うち一般管理費	1,476
事業部門経費	3,705
うち人件費	824
うち展示事業費	1,769
うち調査研究事業費	169
うち教育普及事業費	943
減価償却費	114
収益の部	5,604
運営費交付金収益	4,515
展示事業等の収入	975
資産見返運営費交付金戻入	47
資産見返物品受贈額戻入	67

4 資金計画

平成20年度資金計画

(単位:百万円)

区 分	金 額
資金支出	15,735
業務活動による支出	5,490
投資活動による支出	10,245
資金収入	15,735
業務活動による収入	6,765
運営費交付金による収入	5,790
展示事業等による収入	975
投資活動による収入	8,970
施設整備費補助金による収入	8,970